論　説

『宝徳蔵般若』の蒙古語訳について*

樋口　康一

東洋学報

0. はじめに

Prajñā-pāramitā-ratṇa-guna-saṃcaya-gāthā（『仏説仏母宝徳蔵般若波羅密経』[1]）は，梵・蔵本に関する研究は湯山明氏をはじめとする諸学者によって近年精力的にすすめられているが，その蒙古本については未だほとんど研究されていない。

蒙古仏典，とりわけ大蔵経所収のものは，従来その成立年代が比較的新しいため言語資料としての価値はあまりないと考えられていた。しかし，例えばPoppeの『金剛般若経』の蒙古本に対する研究によって示されるように，大蔵経所収の仏典の中にも，先古典期特有の，おそらくは14世紀頃にまでさかのぼり得るような言語特徴を示すものがあること――すなわち，17世紀以降の古典期蒙古文語資料に比し，それ以前の先古典期蒙古文語の資料はきわめて数が少ないため，その言語学的研究も進捗していないが，仏典がこの資料的空白を埋め得る好箇の言語資料であることが判明しつつある[2]。

『宝徳蔵般若』の蒙古本は，後述するように，大蔵経所収のものを含め18世紀に開版された木版本しか現存しないが，これらの中にも先古典期にまでさかのぼり得るような言語特徴を示すものがあることが明らかになった。本稿の目的は『宝徳蔵般若』の蒙古本を，主として言語の面から分類，整理し，その文献学的問題を論じるとともに，蒙古本の中には先古典期蒙古文語の資料としてすぐれた価値をもつものがあることを論証することにある。

I．解　題

『宝徳蔵般若』は「智慧の完成の功徳を「集録」「提要」し，その実践によって功徳を「積集」し，智慧の完成に到るべき説く」詩篇であり，『八千頌般若』と内容的に密接な関連があることが指摘されているが，かつて言われていたように『八千頌般若』の単なる提要や釈論ではなく，独立した経典であることが明らかにされている(3)。

梵・蔵各二点のほか法顕訳の漢本をあわせ五種の異本があり，このうち蔵本が蒙古本と最も深い関係を持っている。二点の蔵本の一方（これを蔵文A本とよぶ）は敦煌出土の写本五典が代表し，その他の全ての刊本・写本は他方の異本（これを蔵文B本とよぶ）に属する。これには，E. Obermiller が出版した『宝徳蔵般若』の底本となった梵・蔵対訳木版本が含まれる。なお，般若経系の経典のうち『一万八千頌般若』は蔵文のみが存在するが，この第八十四章は蔵文B本の『宝徳蔵般若』と同一の行文から成っている(4)。

II．『宝徳蔵般若』の蒙古語訳

現在利用し得る蒙古本『宝徳蔵般若』のテキストは，単行のもの，仏典集に収められているものおよび『一万八千頌般若』の第84章を含め8点ある。

これらは，旧訳I，旧訳II，新訳の三種に大別できる。旧訳と新訳のちがいはもっぱら行文中に古い言語形式を保存しているか否かによるもので，旧訳の直接の改訂版が新訳であることを意味するものではない。旧訳Iと旧訳IIのちがいは，言語学的なものではなく，後述するような文献学的な観点からなされたものである。

旧訳Iに属するのは蒙古大蔵経経部所収の単行の『宝徳蔵般若』（Ligeti 1942-4 の整理番号にしたがい K767 とよぶ）および18世紀に北京で開版された木版仏典集所収の『宝徳蔵般若』（Heissig 1954 の整理番号にしたがい PLB34 とよぶ）の2典である(5)。

旧訳IIに属するのはやはり18世紀に北京で開版された一連の木版

仏典集4典（PLB 13,49,67,72）に所収の『宝徳蔵般若』である[6]。

新訳は『一万八千頌般若』第84章である。現在利用可能な『一万八千頌般若』は大蔵経所収のもの（K764）および北京木版本（PLB 32）の2典である[7]。

それぞれのグループを構成する各テキスト（例えば旧訳Iを構成するK767とPLB34など）の間には，若干の形式に対する表記のちがいを除けば，行文の異同はほとんど無い[8]。

旧訳6点には全て奥書があり[9]，いずれも自らが『一万八千頌般若』の第84章である旨を記しているが，現行の『一万八千頌般若』第84章（すなわちここでいう新訳）とは行文が大きく異っており，両者の間に直接的なテキストの系譜関係を認めることは困難である。

大蔵経所収のものを含め新旧訳8点は全てが18世紀に開版されたものである[10]。旧訳の奥書はチベット語訳の（梵語からの）訳者の名を記すのみで，蒙古語訳そのものについては製作の年月や訳者の名など一切記していない。しかし，この『宝徳蔵般若』の蒙古語訳は先古典期おそらくは14世紀頃に行なわれたと推定できる。旧訳には，後述するように，この時期に特有で後代の文献資料には現われない言語形式が見出されるからである。一方，新訳ではこれらの特徴的な形式は払拭されており，新訳が14世紀の原テキストとの関係はさておき，より後代に成立したことを物語っている。

旧訳Iと旧訳IIの行文はよく似通ってはいるが，奥書で言及されているチベット語訳の訳者名や，偈頌の数，章の分け方が一致していないため，両者を同一の底本に基く異本であるとは認められない。

奥書によれば，旧訳IはVidyākarasiṃhaとDpal-brtsegsが梵語から訳したチベット語訳に基き，旧訳IIはSiṃhabhadraとDharmapālabhadraのチベット語訳に基くとされている[11]。前二者は西蔵大蔵経所収の単行の『宝徳蔵般若』の訳者であり，後二者も蔵文B本系統に属するいくつかの『宝徳蔵般若』の訳者として名をあげられている[12]。

偈頌の数については，303頌からなる梵文A本に対しB本は前者の第12章第5頌（以下XII-5と表わす，他のものも同様）にあたるもの

を欠き302頌で構成されており，一方蔵本では全てXII-5を欠くほかさらに梵蔵対訳木版本以外のあらゆるテキストがどちらの異本に属するかを問わず，XIV-3の第3，4句(以下XIV-3cdと表わす，他のものも同様)，XIV-4ab，XIX-4を欠くこと，つまり，梵蔵対訳木版本のみが302頌から成り，その他の蔵本は全て300頌で構成されていることが明らかにされている[13]。蒙古本各テキストについて偈頌の数を検討した結果，旧訳IIと新訳はXII-5のみを欠き302頌から成り，一方旧訳IはXII-5に加えXIV-3cd, 4ab, XIX-4を欠き300頌で構成されていること，蔵本との関係で言えば旧訳IIと新訳は梵蔵対訳木版本と平行し，旧訳Iはその他の蔵本——西蔵大蔵経所収の『宝徳蔵般若』を含む——と平行していることが判明した。

表1．偈頌の数から見た梵・蔵・蒙古本の異同

偈頌数	303	302	300
欠落している偈頌	———	XII-5	XII-5，XIV-3cd XIV-4ab, XIX-4
梵本および蔵本	梵本A	梵本B・梵蔵対訳本	その他の蔵本
蒙古本	———	旧訳II, 新訳	旧訳I

章立ては梵本，漢本が全て32章から成り，梵蔵対訳木版本も同様であるのに対し，その他の蔵本は章が設けられていない[14]。一方，蒙古本については，旧訳Iは9章に，旧訳IIと新訳は8章に分けられており[15]，これは梵本・蔵本（さらに漢本）にも類例のない独自の

表2．蒙古本3種の章立て

	I-1ab	I-1c～I-28d	II-1a～VIII-1d	VIII-Za～XIV-2d	XV-1a～XX-2ld
旧訳I	I	II	III	IV	V
旧訳II 新訳	I		II	III	IV

	XX-22a～XXXI-18d	XXXII-1a～XXXII-4d	XXXII-5a	XXXII-5b～XXXII-6d
旧訳I	VI	VII	VIII	IX
旧訳II 新訳	V	VI	VII	VIII

章立てである。しかも，章の分け方そのものも表2に見られるようにきわめて特異である。

最上段は梵本（および梵蔵対訳木版本）における章立てを示している。例えば，旧訳Iの第1章は梵本I-1abの2句のみから成り，梵本I-1c以下28aまでが旧訳Iの第2章にあたるが，この旧訳Iの冒頭2章（すなわち梵本I-1a～28d）が旧訳IIと新訳の第1章に相当するのである。さらに，旧訳Iの第8章（すなわち旧訳IIと新訳の第7章）にあたるのは梵本XXXII-5aという一句のみであることなど奇異の念を抱かざるを得ない分け方である。また，章に分けるに際し，蒙古仏典で通常使用されるbölög「章」という用語を用いず，旧訳I，IIではjabsar「中断・休止」，新訳ではüy-e「節・つぎめ」という用語を用いている点も特異である[16]。このような異例の章立てを行った理由は今のところ全く不明であるというほかない。

以上示したように蒙古語訳『宝徳蔵般若』に関する文献学的な諸問題の解明は今後の研究をまつところが多いのである。

III. 『宝徳蔵般若』旧訳の言語特徴

すでに述べたように，旧訳の行文中には旧訳が14世紀頃に成立したと推定できる先古典期蒙古文語特有の言語特徴が見出される[17]。以下ではそれらのうち特に注目すべきものをとりあげ，適宜新訳と対照しつつ論じたい。

なお以下では混乱をさけるため梵文A本の章立てによって章数を表示した[18]。特にことわりのないかぎり和訳は旧訳Iに対するもののみを掲げた。また対照の用に供するため，法顕訳の対応すると思われる行文をそえた。

A. 正書法上の特徴

現在利用可能な『宝徳蔵般若』のテキストは全て18世紀の木版本であるからその綴字法は概ね古典期文語の規範に忠実であるが，旧訳IIのXXI-8aには先古典期の正書法の痕跡を見出すことができる：

XXI-8a

旧訳 I　ken be balγasun-dur ba daki aranyatan-dur abasu ber
旧訳 II　ked be balγasun-dur ba dan-i aranyatan-dur abasu ber
新訳　alimad kedün buyu ese bügesü keyid-tür orosiγsan ču bolba

「誰であれ都市にいるにせよ遠離の地にいるにせよ」(19)

法顕訳「雖住城隍及山野」

旧訳 I と旧訳 II の比較から，dan-i は実は daqi「も，また，あるいは」(古典期文語の規範にしたがえば旧訳 I のように daki と綴られる) にほかならず，もとになったテキストでは daqi と綴られていたと推定できる。āleph 1 本の文字 n と 2 本の q は点のない場合混同されやすいため，テキスト伝承の過程で旧訳 I のように k と修正されるはずの q が旧訳 II では誤って n とされたのであろう(20)。

先古典期の文献資料には ki, gi と平行して qi, γi という綴字が見出されるのに対し，古典期文語で確定した正書法においては q, k, γ, g のうち i の前にたち得るのは k, g のみで，qi, γi という綴字は全く姿をひそめてしまう。この q, γ の後に現われる i を原始蒙古語*ī の痕跡と見る意見もある(21)。いずれにせよ，17世紀以降に新たに著述・翻訳された文献には現われるはずのない qi の痕跡が見出されることはこの『宝徳蔵般若』旧訳がそれ以前の時期にすでに成立していたことを物語っているといえるだろう。

B.　複数形と数の一致

『宝徳蔵般若』旧訳で使用されている複数形の接尾辞のうち特に注目に値いするのはもっぱら先古典期において生産的に使用された -n である。

-n は派生接尾辞 -či, -tai/-tei をともなう語のように最終音節が Ci, もしくは CVi である語に接続するが，後者の場合 i が脱落し CVn を最終音節とする複数形が形成される(22)。前者の一例として III-5d の otačin (<otači「医師」)，後者の一例として X-3d の qulaγan (<qulaγai「盗人」) をあげよう。

III-5d

旧訳 I　ene arvis tarni-yi suruγsan-iyar tengsel ügei otačin-u qan bolbai

旧訳 II　ene arvis tarni-yi suruγsan-iyar otačin-u eng degedü qaγan bolbai

新訳　ene arvis tarni-dur surulcaγsan-iyar deger-e ügei otačis-un qan bolbai

「この真言を学ぶことによってならぶものない医師の王となった」[23]

法顕訳「光此明得無上師」

X-3d

旧訳 I　ǰali amuraγad buliyaγčin qulaγan-u ayul ügei bolai

旧訳 II　同　上

新訳　sedkil-iyen amaraγad qulaγai degerme-eče ülü ayuqu bolai

「(不安の) 炎 (?) が安まり盗賊や詐欺の恐れがない」[24]

法顕訳「心得安穏無賊怖」

古典期文語では otači, qulaγai の複数形は各々otačis, qulaγas, qulaγad などになる。

次に述べる -γčin や -qun を除き，本来の実詞に対する -n による複数形の形成は上記 2 例をを含め旧訳 I では 6 例 (5 語)，旧訳 II では 5 例 (5 語) 見出されるのに対して，新訳ではそのほとんどが上記の例に見られるように他の形式で置き換えられておりわずか 1 例が保存されているにすぎない。

行為者を示す形動詞語尾 -γči/-gči の先古典期的な複数形，次の V-6b の -γčin/-gčin もこの -n によって形成される[25]。

V-6(b)

旧訳 I　tere čaγ-tur amitan üile üiledüged kičiyen yabuγčin-dur adali

旧訳 II　tere kü čaγ-tur amitan üile üiledken kičigen yabuγčin-dur adali

新訳　tere čaγ-tur amitan üile üiledküi-dür kičiyekü tegün-čilen kü

「その時に衆生が行を行って勤修するのに似て」(26)

法顕訳「普使成就種種業」

古典期文語における -γči/-gči の複数形は -γčid/-gčid である。-γčin/-gčin は旧訳Ⅰでは12例（7語），旧訳Ⅱでは24例（13語）見出されるが，新訳では皆無である。

また，次のXI-4(a)に見られる -qun/-kün は未来の形動詞語尾 -qui/-kün の複数形であり，これも -n による複数形形成の例である(27)。

XI-4(a)

旧訳Ⅰ　tere metüs ülü medekün tede ündüsüm metü ene nom-i tebčikü

旧訳Ⅱ　tere metüs ülü medekün tede ündüsün metü nom-i tebčijü

新訳　tere metü medel ügei tedeger ijaγur-i oγurču bür-ün

「そのように無知のかれらが根本のようなこの法を捨てる」(28)

法顕訳「愚癡無智無方便」

-qun/-kün は旧訳Ⅰで14例（3語），旧訳Ⅱで13例（3語）が見出されるのに対して，新訳における用例は1例のみである。

なお上記の例では複数形の被修飾語 tede（<tere「彼・それ」）に呼応して修飾語も複数形の medekün（<medeküi「知っている」），metüs（<metü「～の様な」）が使用されている。このような数の一致の現象は先古典期特有のものであり(29)，旧訳では上記 XI-4(a)や次の V-9(a)を始めいくつかの例が見出される。

V-9(a)

旧訳Ⅰ　ene yirtinčü-dür kedüi bükün gegen gerel-ten amitan

旧訳Ⅱ　ene yirtinčü-dür kedüi bükün bey-e-ben gegegen gerel bolγaγči amitan

新訳　ene yirtinčü-dür kedüi bükü amitan-u gerel

「この世界においてありとあらゆる明るい光をはなつ有情は」(30)

法顕訳「譬如世間螢有光」

本来は複数形である amitan (<ami-tai「生命をもっているもの＝生物」) に対する修修語も複数形 bükün (<büküi「ある」) が使用されており，さらに旧訳 I では gerel-ten (<gerel-tei「光をもった」) がこれに呼応している。

C. 動詞語尾

旧訳で使用されている様々の動詞語尾のうち，直接法語尾には特記すべきものはない。

(1) 命令・願望法語尾

(a) Benedictive -dqun/-dkün

次に掲げる VII-7(b) で 1 例だけ使用されているいわゆる Benedictive の語尾 -dqun/-dkün は先古典期文語特有の形式であり，古典期文語ではこれに音位転換が作用して生まれた -γtun/-gtün がもっぱら使用されるようになった[31]：

VII-7(b)

旧訳 I　kürsügei ele kemebesü ilaγuγsad-un ene eke-dür anu bisiren süsülüdkün

旧訳 II　kürsügei ele kemebesü ilaγuγsad-un ene eke-dür bisiren süsülüdkün

新訳　kürüy-e kemen küsebesü ilaγuγsan-u ene eke-dür bayasun üiled

「(般若波羅密に) 到達しようと言うのなら諸仏のこの母 (のようなもの) に信じ頼ればよい」[32]

法顕訳「不能信重諸仏母」

(b) Voluntative -su/-sü

いわゆる Voluntative の語尾として古典期的な -suγai/-sügei とともに先古典期的な -su/-sü が平行して使用されているのも注目される[33]。

II-4(b)

旧訳Ⅰ　bradikabud ba tegünčilen nom-un qaγan burqan bolsu kemen küsebesü ele

旧訳Ⅱ　同　上

新訳　bradikabud ba tegünčilen nom-un qan bolqu-yi küsegči

「縁覚あるいは如法の王たる仏になろうと願うのなら」[34]

法顕訳「若求声聞縁覚等　乃至仏果亦復然」

旧訳Ⅰ・Ⅱとも -suγai/-sügei が7例(7語)，-su/-sü が4例(4語)使用されており，新訳でも前者が1例，後者が3例(3語)使用されている。

(2)　形動詞語尾

形動詞語尾のうち注目されるのは -γčin/-gčin, -qun/-kün という複数形の語尾であるが，これらについてはすでに論じたのであらためてはふれない。

なお未来の形動詞 -qu/kü および -qui/-küi については，古典期では前者はもっぱら叙述的あるいは限定的に，一方後者は実詞的にという用法の区別があるが，旧訳では他の先古典期の文献資料同様このような区別は見出せないことを付記しておく[35]。

(3)　副動詞語尾

(a)　-run/-rün

副動詞語尾に関して，旧訳の特色を最もよく表わしているものとして準備副動詞語尾 -run/-rün の多様な用例をあげることができる。

古典期にはもっぱら ügüler-ün, öčir-ün ともに「曰く」や ǰarliγ bolur-un「おっしゃるには」などの化石的な表現にのみ使用されるこの副動詞語尾も先古典期にあっては様々の動詞語幹に接続し多様な意味をになって使用されていたことが確認されている[36]。旧訳においては次に掲げる例のように先古典期的な状況が観察できるのである：

X-5(a)(b)

旧訳 I　nigen kümün dalai-yin usun-u üǰekü-yin tulada odur-un/ker be mod oi kiged aγulas üǰegdebesü daki qola kemen sedkijü

旧訳 II　adalidqabasu nigen kümün/dalai-yin usun-u üǰekü-yin tulada odur-un/ker ber mod oi kiged aγulas üǰegdebesü daki qola kemen sedkiǰü

新訳　dalai-yin usun-i üǰekü-yin tula aduγsan nigen kümün ber/ker be modun ba oi čečeglig aγula üǰegdebesü edüge qola kemen sedkiǰü

「ひとりの人間が海の水を見るためにおもむく途中　もし木や森，山が見えたらまだ（目的地は）遠いと考えて」(37)

法顕訳「譬如人住観大海　先見大山大樹林」

X-8(c) (d)

旧訳 I　tegünčilen bovadhi saduva-nar ber ilaγuγsad-un bilig baramid-i sonosur-un/bayasqui küsekü törökü bolbasu el-e ödter qutuγ-tur kürmü ǰ-e

旧訳 II　tegünčilen bovadhi saduva-nar ber ilaγuγsad-un bilig baramid-i sonosur-un/bayasqui küsekü törökü bolbasu ele ödter qutuγ-tur kürümü

新訳　tegünčilen bovadhi saduva ilaγuγsan-u bilig-iyer nengdebesü/bayasqu kiged baraγdaqu sedkil töröged türgen-e bovadhi qutuγ-tur kürkü bolai

「そのように菩薩らが仏の般若波羅密を聴聞することによって喜びや望みが生まれるならただちに仏位に至るのである」(38)

法顕訳「菩薩若聞宝徳蔵　速成正覚祥瑞」

XXI-1(b) (c)

旧訳 I　bütügsen-iyer ba vivangkirid aquyu kemen eremsikü sedkil törögülür-ün ba/daki tere bovadhi saduva busud-a vivangkirid ögdeǰü eremsibesü

旧訳 II　bütükü-ber vivangkirid ögdeǰü amu kemen eremsikü sedkil törögül-ür-ün/kerbe tere busud-un vivangkirid

ögdeyü kemen eremsibesü

新訳　büridügsen-iyer bi vivangkirid ögdebe kemen eremsikü sedkil bolqu buyu/kerbe bovadhi saduva busud-un vivangkirid ögdegsen-e eremsin

「(加持を) 成就したことによって授記をさずかったとおごる心が生まれたりあるいは　またもしその菩薩が他者から授記をさずかったとおごるなら」(39)

法顕訳「我得授記非能所…若見授記及能所」

XXII-9(a) (b)

旧訳 I　ken be bilig baramid-tur masida kičiyer-ün/ai yadabasu nigen edür daγan adali üiledbesü ele

旧訳 II　ked ber bilig baramid-tur masida kičiyer-ün/ai yadabasu nigen edür daγan adali üiledbesü ele

新訳　alimad bilig baramid-tur masida kičiyeküi ba/ yadabasu nigen edür-tür γaγcaqan-da daγan ǰokilduqu-yi üiled-besu

「誰でも般若波羅密に大いに精進するか (あるいは) 悲しいかなそれがかなわないなら (せめて) 一日 (それに) ならって行じれば」(40)

法顕訳「若復有人於一日　奉行最上般若行」

XXVII-4(c)

旧訳 I　ünen dura-bar bütüger-ün iledte kičiyen yabubasu ele

旧訳 II　同　上

新訳　ünen kü sanaγan-iyar bütügeküi-e iledte kičiyen üiled-besü

「(般若波羅密を) 深心をもって成就すべく勤修するなら」(41)

法顕訳「内心真実而奉行」

この副動詞語尾の用例は旧訳 I では44例 (16語)，旧訳 II では48例 (18語) あるのに対し，新訳では 4 例 (3 語) にすぎず，きわだった対照を示している。この -run/-rün の多種多様な用例は『宝徳蔵般若』の蒙古語訳が先古典期に成立したことを物語る有力な証拠の一つにあげられるものである。

(b) -tala/-tele

この期間副動詞語尾による熟語 yaγun ügületele bui「言うまでもない」は先古典期の文献資料にのみ見出される表現である[42]。この用例は新訳では皆無であるが，旧訳 I，II では次の例を含めそれぞれ 3 例が確認される。

XXIII-4(d)

旧訳 I　nom-un qaγan oron-dur bolbasu ele daki yaγun ügületele bui

旧訳 II　nom-un qan bolbasu ele daki yaγun ügületele bui

新訳　nom-un qan oron-dur saγubasu yaγun ügülekü

「(明智をそなえた菩薩らが) 法の王位に着くのはまた言うまでもないことである」[43]

法顕訳「決定當證法王位」

D. 動詞 bü- の活用

繋辞 bü- は古典期文語ではこれに接属し得る動詞語尾がきわめて限られた動詞となったが，本来は自由に活用した動詞と考えられている。先古典期の文献資料の中にわずかながら古典期文語では結合が許されない語尾に接続している用例が見出されるからである。その一つに完了の形動詞語尾 -γsan/-gsen と結合した bügsen がある。この形式は現在までに『元朝秘史』，『金剛般若経』，『入菩提行論』に各 1 例およびいわゆる羽田写本に 3 例，計 6 例が例証されているにすぎない[44]。『宝徳蔵般若』旧訳にはこの形式が 3 例見出される：

I-19(c)(d)

旧訳 I　alaγdaγsan tede yambar bügsen bügesü tere metü bovadhi saduva-nar ber/qamuγ amitan-i yelvi metü sayitur medegsen-iyer tegün-dür ayul ügei

旧訳 II　alaγdaγsan tede yambar bügsen bügesü tere kü metü bodisdv-nar ber/qamuγ amitan-i yelvi metü sayitur medegsen-iyer tegün-dür ayul ügei

新訳　tedeger alaγdaγči yambar metü bügesü tere metü bovadhi saduva/qotala amitan-i qubilγan metü sayitur medejü tegün-eče ülü ayumu

「殺されたそれら(の人々)がどれほどであってもそのような菩薩らは　一切衆生は幻化のごとしと知っているのでそれに対する恐れがない」(45)

法顕訳「一切世界皆幻化　菩薩知已得無怖」

I-26(a)

旧訳 I　öber-i yambar bügsen bügesü qamuγ amitan-i tere kü metü medegdekü

旧訳 II　öber yambar bügsen bügesü qamuγ amitan-i tere kü metü medegdekü

新訳　öber-i yambar metü bügesü qamuγ amitan-i tere yosuγar medekü

「自分がいかようであったにせよ一切衆生もまたそのようであると知るべきである」(46)

法顕訳「知自及諸衆生等」

XXVI-2(a)(b)

旧訳 I　buyan qutuγ-i eriged busud-a tusa-yi sedkigči amitan kedüi bügsen bügesü/tede bügüde-yin buyan-u čoγčas-tur ber bayasun nököčegsen bol-un bui

旧訳 II　buyan qutuγ-i eriged busud-un tusa-yi sedkigči amitan kedün bügsen bügesü/tede bügüde-yin buyan-u čoγčas-tur ber bayasun nököčegsen bol-un bui

新訳　buyan-u tusa-yi kereglen tusa-yi taγalaγči amitan kedüi bükü/bügüde-yin buyan-u čoγča-dur ču daγan bayasqu bolumu

「功徳を求め他人に益(すること)を考える衆生がどれほどいたとしても　かれら(菩提心を発したものたち)は(その)全ての功徳の集積に喜び親しむのである。」(47)

法顕訳「衆生為求解脱法　一切随喜作福蘊」

3例いずれもがbügsen bügesüという熟語表現の中に見出されるのは，先述の6例と同様である。この14世紀の文献資料にしか例証されないまれな形式を保存していることも『宝徳蔵般若』が先古典期に蒙古語訳されたことを立証する有力な証拠の一つにあげられる。

E. 受動文に関して

古典期文語では受動文の意味上の主語には一方の与・位格語尾 -dur/-dür が接続するが，これはもう一方の与・位格語尾 -da/-de, -a/-e の機能が衰退した結果であり，本来は先古典期の文献資料に見出されるように意味上の主語には -da/-de, -a/-e が接続したものと推定されている[48]。旧訳では次のII-6(d), XXXII-2(d)の例が示す通り，先古典期的な方式で意味上の主語が示されているものが大多数を占める。

II-6(d)

旧訳I　dötüger sayin nökör baγsi-da oγoγata eǰelegden bolai

旧訳II　dötüger sayin nökör baγsi-da eǰilegden bolai

新訳　dötüger buyan-u saduv-a ber oγoγata eǰelegdegsen bolai

「(四種の補特伽羅のうち) 四番目の善知識は師に完全に指導されているものである」[49]

法顕訳「仏子當住四補特伽羅…四善友同等」

XXXII-2(d)

旧訳I　üjeküi-e sayin altan öngge-tü amitan-a üǰegdekü metü yosutu boluyu

旧訳II　同　上

新訳　altan öngge metü ǰokistu boluγad amitan ber üǰekün yosutu bolumui

「見目美わしい金色をしているように衆生には見えることになる」[50]

法顕訳「如金世間悉愛楽」

II-6(d) では eǰele-gde-（「指導される」）の意味上の主語 baγsi は -da をともない XXXII-2(d) では üǰe-gde-（「見られる」）の意味上の主語 amitan が -a をともなっている。

意味上の主語を明示した受動文は旧訳Ⅰ，旧訳Ⅱ，新訳においてそれぞれ12例，12例，7例あるが，旧訳Ⅰではそのすべてにおいて旧訳Ⅱは11例においてまた新訳では4例において先古典期文語特有の方式にしたがい意味上の主語が明示されている。

F. 受動接尾辞と使役接尾辞の結合順序について

同一の動詞語幹に受動接尾辞と使役接尾辞が同時に接続する場合，その接続の順序には時代と地域に応じた特異性があることが報告されている[51]。すなわち，先古典期文語（および中期蒙古語）や現代モンゴル語ブリヤート方言では動詞語幹＋使役接尾辞＋受動接尾辞という順序が支配的であるのに対し，古典期文語や現代モンゴル語ハルハ方言では動詞語幹＋使役接尾辞＋受動接尾辞という順序が支配的である。

『宝徳蔵般若』については同一語幹に受動接尾辞と使役接尾辞が同時に接続している用例が旧訳Ⅰ・Ⅱに各4例，新訳に1例かるが，そのすべてにおいて次に掲げる例に見られるように，動詞語幹＋使役接尾辞＋受動接尾辞の順序で接続している。

X-8(a)

旧訳Ⅰ　adalidqabasu ǰirmüsün qatun kümün ǰobalang-a ayuγuldaqu bolbasu ele

旧訳Ⅱ　adalidqabasu ǰirmüsün qatun kümün ǰobalang-a ayuldaqu bolbasu ele

新訳　adalidqabasu ali ǰirmüsün eke-ner qučilγalaqu-yin ǰobalang ǰigür bolbasu

「例えばはらんでいる女性が苦しみを恐れるようになるなら」[52]

法顕訳「亦如女人懐其妊」

旧訳Ⅰに見られる ayuγulda-（語構成に忠実に訳すなら「恐れさせられる」となる）は語幹 ayu-＋使役接尾辞 -γul-＋受動接尾辞 -da- とい

う構成である。この点では旧訳IIの ayulda- も同様であるが，使役接尾辞 -γul- のかわりに先古典期の文献資料に散見する形式 -l- が使用されていることが注目される[53]。

XXI-7(d)

旧訳 I　tere kümün simnus-un erke-dür oroγuldaγsan bolai kemen ilaγuγsan nomlabai

旧訳 II　tere kümün simnus-un erke-dür oroγuldaγsan bolai kemen ilaγuγsan nomlaba

新訳　tere anu simnus-un yabudal viǰai-dur orosiγsan kemen ilaγuγsan nomlabai

「その人は悪鬼の力(の及ぶところ)に閉じ込められたのであると仏は説いた」[54]

法顕訳「此亦知彼魔所作」

ここでも旧訳 I・II に見られる oroγulda-（語構成に忠実に訳すなら「入れられる」となる）は語幹 oro-＋使役接尾辞-γul-＋受動接尾辞 -da- という構成である。

IV. 『宝徳蔵般若』新訳の言語特徴

新訳（＝『一万八千頌般若』第八十四章）は『一万八千頌般若』の他の章と同質の言語特徴を示す。それは蒙古文語の歴史区分の上では「旧訳」が代表する年代よりはかなり新しい時期に属するものである。間接的には上述の新旧訳の対照によっても示されているが，以下ではさらにこの新訳の「新しさ」を例証する事例を若干紹介したい。なお和訳は新訳に対するものである。

(a) 定動詞語尾 -nam/-nem

直接法現在の定動詞語尾 -nam/-nem は，最古の出現例が16世紀のものと推定される Olon Süme 出土の文書断片中に見出されるもので，古典期文語特有の形式と考えられている[55]。これが1例ではあるが，新訳で使用されている。

X-3(c)

新訳　edeger ayil yeke qota balγasun-luγ-a oyiraduγsan bayinam kemeǰü

旧訳 I　edeger büged balγasun qoton oyir-a boluγsan-u belge kemen sedkiǰü

旧訳 II　edeger büged balγasun kiged qoton oyir-a boluγsan-u belge buyu kemen

「これらは人家，大きな町，城に近づいた（しるしな）のだと」(56)

法顕訳「知去城郭而非遙」

なおこの形式は古典期文語で書かれた年代記等の世俗文献ではさかんに使用される反面，仏典，少くとも大蔵経所収のものの中で使用されることはきわめてまれであり，この点でも新訳は特異であるといえる。

(b)　小詞 ču および譲歩副動詞 -baču/-bečü

次の例に見られる強意の小詞 ču は先古典期文語の ber にとって替り古典期文語においてさかんに使用されるものである。

XX-17(c)

新訳　tegün-dür ču ülü orosin erdeni-yin dvib-tur ču ülü orosiqu büged

旧訳 I　tende ber ülü saγun erdeni-tü qoi-dur ber ülü saγun

旧訳 II　tende ber ülü saγun erdeni-tü qoyiγ-tur ber ülü ayu

「そこにも安住せず宝の島にも安住しないで」(57)

法顕訳「雖達宝所亦非住」

また次の例で使用されている譲歩副動詞 -bačiは本来の形式 -baču の表記法上の変種であるが，この -baču/-bečü は直接法過去の定動詞語尾　*-ba/-be にこの小詞 *ču が接続したものを起源とし(58)，やはり古典期文語においてはじめて登場する形式である。

XIV-9(a) (b)

新訳　ǰaγun qorin nasulaǰu kögsireged ǰobaγsan kümün/ bosbači mön öber-iyen yabun čidaqu busu büged

旧訳 I　ǰaγun qorin nasulaγsan ötegü ɟobalang-tu kümün

bosbasu ber öber-iyen yabun čidaqu busu ber

旧訳II ǰaγun qorin nasulaǰu ötegü ǰobalang-tu kümün/bosbasu ber öber-iyen yabun čidaqu busu buyu

「齢百二十の老いて苦しむ人は起ちあがっても自分では進めないが」(59)

法顕訳「如百歳人復病患　是人不能自行立」

cu, -bacu/-becü とも旧訳のいずれにおいてもその用例が皆無であるのに対して，新訳では各々78例，35例の用例が見出され，きわだった対照を示している。

(c) 繋辞としての mön

XVI-7(d)

新訳　ülü ničuqui-yin belge anu edeger mön kemen medegdeküi

旧訳 I　tedeger kemebesü ülü ničuqui belges buyu kemen medegdeküi

旧訳II　tedeger kemebesü ülü ničuqui belge buyu kemen medegdeküi

「不退転のしるしはこれらであると知るべきである」(60)

法顕訳「是名不退之菩薩」

新訳における mön は旧訳における buyu に対応していることから見て，繋辞として機能していると考えてよい。mön（『元朝秘史』における「門」mün）は，先古典期蒙古文語や中期蒙古語では「真の，当の」という意味の形容詞，副詞としてのみならず文脈によっては三人称の人称代名詞としても使用される多機能の形式であり，現代モンゴル語の対応形式 мөн にはさらに繋辞としての用法もある(61)。この用法がどの時期にまでさかのぼり得るかはなお今後の課題としたいが，少くとも先古典期文語あるいは中期蒙古古語の文献資料には純然たる繋辞としての用法は見当らない。この現代モンゴル語 мөн の用法と軌を一にする mön は旧訳では全く使用されていない反面，新訳では12例使用されており，新訳の言語の性格の一端

を物語っているといえるであろう。

V. おわりに

以上見たように新訳の言語と旧訳の言語は異った時期に属するものである。これらが，旧訳IIはさておき，ともに般若部の仏典(あるいはその一部)として等しく蒙古大蔵経に収められていることは現存の蒙古大蔵経の成立が，例えばある一時期に全ての仏典が一斉に蒙古語に訳されたといったような単純な過程を経たものではないことを物語っているとも考えられるが，この問題についてはさらに別の角度から考察する所存である。

いずれにせよ，なお未解決の文献学上の問題はあるものの,『宝徳蔵般若』の旧訳は14世紀にまでさかのぼり得ると推定される言語特徴を示しており，先古典期蒙古文語資料として『金剛般若経』等と同等の価値を有することは明らかであると結論したい。

＊　本稿は1983年9月の第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議第6部会における研究発表に基くものである。

註

(1)　漢訳は『大正新修大蔵経』No. 229。以下では『宝徳蔵般若』と略称する。チベット語名は Śes-rab-kyi pha-rol-tu phyin-pa yon-tan rin-po-che sdud-pa tshig-su bcad-pa, 略称は Sdud-pa tshig-su bcad (Yuyama 1976, p. xxx)。蒙古語名は Qutuγ-tu bilig-ün činadu kiǰaγar-a kürügsen quriyangγui silüg (尊い知恵の彼岸に到達した讃頌集)，略称は Quriyangγui silüg。

(2)　蒙古語史の区分，研究状況，および仏典の言語資料としての位置づけ等については樋口1980, pp. 176-7 を参照。また『金剛般若経』については Poppe 1971を参照。

(3)　引用は湯山1973, p. 272 からのものである。

(4)　湯山1973, pp. 276-9 および Yuyama 1976 の Bibliographical Notes の章を参照,

(5) K767はカンジュール通巻第47巻『諸般若経』第6巻1～27vに所収，Ligeti 1942-4, pp. 184-5を参照。

PLB34はEldeb bilig baramid orosiba（「聖般若波羅密多輯攝偈」）1-21rに所収，Heissig 1954, p. 35およびPoppe, Hurvitz, Okada 1964, pp. 21-2を参照。

(6) PLB13はTarnis-un quriyangγui（陀羅尼集）に所収，Heissig 1954, pp. 22-3を参照。

PLB49はQutuγ-tu quriyangγui zungdui kemegdekü yeke kölgen sudur（「諸種積呪」）に所収，Heissig 1954, pp. 44-7およびPoppe, Hurvitz, Okada 1964, pp. 53-5を参照。

PLB67はSungdui nögöge bölög（gzungs 'dus第二巻）に所収，Heissig 1954, p. 58およびLigeti 1930, pp. 134-71を参照。

PLB72はZungdui nögöge bölög（「諸品種呪書第二帙」）に所収，Heissig 1954, p. 61およびPoppe, Hurvitz, Okada 1964, pp. 53-5を参照。

なお，「諸種積呪」を除く三者は内容，体裁が全く同一であり，開版の年度を異にするだけである。ここでは，東洋文庫所蔵の「諸種積呪」を用い，後三者を代表するものとしてやはり東洋文庫所蔵の「諸品種呪書第二帙」を用いた。『宝徳蔵般若』は前者の287r-320v，後者の14v-42rに収められている。

(7) 第84章はカンジュール通巻第44巻『第二大般若経』第3巻217v-244rに所収，Ligeti 1942-4, p. 181を参照。PLB32はArban naiman mingγ-a-tu γurban gelmeli kemegdekü sudur（「大般若波羅密多経」第3巻），180r-203vに所収。Heissig 1954, p. 35およびPoppe, Hurvitz, Okada 1964, pp. 18-9）を参照。

なお，この新訳はYuyama 1976のBibliographical Notes中のMongolian Textsにはあがっていない。ちなみにここでいう旧訳IはYuyama 1976の1および2(b)(c)，旧訳IIは2(a)および3(a)-(h)に該当する。

(8) 表記のちがいは名詞語幹と格語尾を分離して表記するか否か，あるいは借用語をどのように表記するかなどにかかわるものである。例えばSkt. bodhisattvaに対する表記として大蔵経所収のもの（K767とK764）は新旧訳の如何を問わず一貫してbovadhi saduvaを採りまた北京木版本のうち旧訳IIに属するPLB49も同様であるのに対し，同じ旧訳IIに属するPLB72はbodisdvを採るが，一方旧訳Iに属するPLB34と新訳に属するPLB32はbodisdu-aを採っているのである。こ

のような表記のちがいが合意するものについては慎重に検討する必要があるが，これを含め借用語の問題に関しては別稿で考察する所存である。

(9) 旧訳Ⅰの奥書は次の通りである：

Qutuγ-tu bilig-ün činadu kijaγar-a kürügsen tümen naiman mingγatu-ača quriyaγsan silüg-ün nayan dörben jüil inu tegüs-be : : : : enedkeg-ün ubadini bidhya-kar-a sinha kiged öčigči lo-chava bande dpal-brtsegs ber orčiγuluγad nayiraγulju debter-tür baγulγabai : :

「『聖一万八千頌般若』のうち集めた偈頌の第84章が終った。インドの大師 Vidhyākarasimha と訳者にして lo-tsha-wa bande たる Dpal-brtsegs が翻訳し編集し書物の形にした」

また旧訳Ⅱの奥書は次の通りである：

Qutuγ-tu bilig-ün činadu kijaγar-a kürügsen tümen naiman mingγatu-aca γaruγsan qutuγ-tu quriyangγui silüg-ün ene jüil tasuraγsan-i : singha badra baγsi enedkeg-ün eke bicig-üd-lüge töbed-ün bicig-i tokiyalduγulju salu locchab-a ayaγ q-a tegimlig dharma baala bhadr-a ber jiči basa ariγudqaju nayiraγuluγsan bolai : : : : :

「『聖一万八千頌般若』のうちの「宝徳蔵般若」のこの章が済んだの（だがこれ）を，Simhabhadra 師がインドの原本（複数）をチベット本に訳し śa lu lo-tsha-wa たる僧侶 Dharmapālabhadra が再び改訂し編集したのである」

(10) 現行のカンジュールは康熙年間の1717年から1720年にかけて刊行されたものである。また，PLB34 は1715年，PLB13 は1708年，PLB49 は1718年，PLB67 は1727年，PLB72 は1729年，PLB32 は1715年に刊行されたものである。

(11) 註(9)を参照。

(12) Yuyama 1976 の Bibliographical Notes の章を参照。

(13) Yuyama 1976 の Bibliographical Notes の章を参照。

(14) Yuyama 1976 の Bibliographical Notes の章を参照。

(15) 「章」と称すべきか否かはかならずしも定かではないが，便宜的にこの名称を採ることにする。（後述註(16)を参照）。

(16) 例えば旧訳Ⅰの第1章から第2章への移行部すなわち I-1(b) と I-1(c) の間には uridu jabsar qamuγ jüil-i medegci-yin cinar üjügülbei（第1の中断（すなわち）一切の種を知るものの相好を示せり）という句が

置かれている。また旧訳Ⅰの第2章から第3章への移行部すなわちI-28(d)とII-1(a)の間にはqoyaduγar ǰabsar qamuγ mör-i medeküi üǰügülügsen（第2の中断（すなわち）一切の道を知ることを示したもの）という句が置かれている。ここは旧訳IIおよび新訳では第1章から第2章への移行部にあたるが，それぞれeng uridu ǰabsar buyu（最も前（＝第1）の中断なり），angqan-u üy-e bolai（最初の節なり）という句が置かれている。旧訳IIや新訳にはない章題らしいものが付けられているのが旧訳Ⅰの特色である。以下，γutaγar ǰabsar sitügen bügüde-yi medeküi uqaγulbai（第3の中断，帰依全てを知ることを悟らせた），dötüger ǰabsar qamuγ ǰüil-i iedte tegüsken uqaγulqui-yi üǰügülügsen（第4の中断，一切種を明らかに成就すべく悟らせることを示したもの），tabtaγar ǰabsar-un üǰügür-i iledte tegüsken onuqui-yi üǰügülbei（第5の中断の頂きを明白に成就すべく悟ることを示せり），ǰirγuduγar ǰabsar-un ečüs-i ber üǰügülbei（第6の中断たる果をば示せり），doloduγar ǰabsar nigen gsan-a nigen-dür iledte tegüsken bovadhi-dur kürtele üǰügülbei（第7の中断，一刹那に一挙に明白に成就して，菩提に至るまで示せり）と続くが，次はnaimaduγar ǰabsar（第8の中断）が置かれているのみであり，最終章の最終句の後には旧訳IIおよび新訳ではそれぞれnaimaduγar ǰabsar bolai（第8の中断なり），naimaduγar üy-e bolai（第8の節なり）という句が置かれているのに対して旧訳Ⅰでは何の句も置かれていない。つまり旧訳Ⅰで存在が明示されているのは第8章までであるのに実際には9部に分けられていることになる。

なお章立てに関しては奇妙な事実がもうひとつある。旧訳Ⅰの第2章第46頌（梵本のVI-9）と第47頌（梵本のVII-1）の間にはoγoγata irügeküi ǰirγuduγar bölög（完全な帰依，第6章）という句が置かれているのである。この句は旧訳IIや新訳には見出されない。この第46頌と第47頌の境目は梵本（および梵蔵対訳木版本）における第6章から第7章への移行部に符合していることが注目される。「6」という数字は現存するテキストに議論を限るなら梵本および梵蔵対訳本にてらしたときはじめて意味をもつものである以上，この句の存在は蒙古語訳『宝徳蔵般若』の成立過程に何らかの関係をもっていることが予想されるが，その詳細は不明であると言わざるを得ない。

(17) 先古典期文語については樋口1980, pp. 176-7を参照。

(18) 特にことわりのないかぎり蒙古語の行文は旧訳ⅠをK767，旧訳IIをPLB49，新訳をK764で代表させた。註(7)でふれた問題を含めたテキス

ト校訂は別の機会にゆずりたい。

(19) Conze 1962 には Obermiller の校訂した梵文テキストに対する英訳が収められている。これによればこの章句に対して Whether he dwells in the neighbourhood of a village, or in the remote forest と訳されている。

なお旧訳に見出される aranyatan という形式は未見の形式である。Skt. aranya「遠離」と関係があることは明白であるが，その語構成には不明な点がある。

(20) このような現象は先古典期から何代にもわたり伝承されてきた文献に散見する現象である。樋口1980, p. 185 を参照。

(21) Pppe 1955, p. 132 を参照。

(22) Poppe 1954, p. 72 を参照。

(23) Conze 1962 の英語は They have, by training in this lore, become the supreme physicians.

(24) Conze 1962 の英訳は He (then) regains his breath, and he has no (more) fear of thieves.

旧訳の ǰali は「火炎」あるいは「奸計」の意。新訳の sedkil-iyen amuraγad は「心が安まり」の意。いずれにせよ，梵文テキストの行文とは直接には対応しないようである。

(25) Poppe 1954, p. 72 および p. 93 を参照。

(26) Conze 1962 の英訳は Then beings exert themselves in doing their work :

(27) Poppe 1954, p. 94 を参照。

(28) Conze 1962 の英訳は Just as, in his ignorance someone would give up the root,

旧訳 I の tebčikü は次句冒頭の mungqaγ-ud「愚者」を修飾する形動詞であるのに対し，旧訳IIおよび新訳の第 1 句は副動詞で終っており，かなり構成を異にしているが，後二者の方がよく梵文テキストの行文とは対応しているようである。

(29) 樋口1980, p. 162 を参照。

(30) Conze 1962 の英訳は If all the light-emitting animals everywhere in this world.

(31) 樋口1980, p. 193 を参照。

(32) Conze 1962 の英訳は Therefore, have faith in this Mother of all the Jinas, (If you wish to experience the utmost Buddha-cognition :)

(33) 樋口1980, pp. 192-3 を参照。

(34) Conze 1962 の英訳は (Those who wish to become the Sugata's Disciples,) Or Pratyekabuddhas, or likewise, Kings of the Dharma.

(35) 樋口1980, pp. 193-4 を参照。

(36) 樋口1980, pp. 196-7 を参照。

(37) Conze 1962 の英訳は As long as a man who travels to the watery ocean in order to see it, Still sees the trees and forests of the Himalayas, (he is far from it).

(38) Conze 1962 の英訳は Just so will the Bodhisattva, if on hearing of the wisdom of the Jinas, He beholds her with delight and zest, speedily experience exlightenment.

(39) Conze 1962 の英訳は 'I have been predestined (Beause) by (my) declaration of the Truth manifold things get accomplished', When a Bodhisattva sets himself above other (Bodhisattvas) as one who has been predestined.

なお旧訳 I の aquyu は aqu(i)+γu (=Mo. uu 疑問の小詞) と解釈したが，なお検討する余地があるかもしれない。

(40) Conze 1962 の英訳は But if someone else, practised in wisdom, the foremost perfection, Would for even one single day comply with it:

(41) Conze 1962 の英訳は And who practises the progressive path with resolution.

(42) 樋口1980, pp. 195-6 を参照。

(43) Conze 1962 の英訳は How much more so when he will be established as king of the Dharma!

(44) 樋口1980, pp. 198-9 を参照。

(45) Conze 1962 の英訳は By a magician, who then cuts off many thousands of heads: He knows this whole living world as a mock show, and yet remains without fear.

(46) Conze 1962 の英訳は He wisely knows that all that lives is unproduced as he himself is;

(47) Conze 1962 の英訳は They rejoice at the heap of merit of all beings that there are, Who desire what is wholesome, (and) who want emancipation.

(48) 樋口1980, pp. 187-8 を参照。

(49) Conze 1962 の英訳は Those whom good teachers mature are reckoned the fourth kind.

(50) Conze 1962 の英訳は With golden skin, dear to the world to look

at.

(51) 小沢 1979, pp. 78-92 を参照。

(52) Conze 1962 の英訳は When a pregnant woman is all astir with pains,

(53) -l- については Poppe 1954, p. 61 および小沢 1979, pp. 208-20 を参照。小沢 1979 で論じられているようにこの -l- は独立した派生接尾辞ではなく，-γul- の書記法上の変種と見るべきであろう。ただし，通常は saγu-, daγu- 等母音＋-γu-/-gü-＋母音で終る語幹にのみ見出されるはずの -l- がここではそれ以外の語幹に現われていることが注目をひく。

(54) Conze 1962 の英訳は Of him the Jina has said that he is established in Māra's sphere.

(55) Weiers 1969, pp. 137-9, Poppe 1955, pp. 262-3 を参照。

(56) Conze 1962 の英訳は (For he knows that) these are signs that a village or city is quite near,

なお旧訳 I, II では büged が動詞 bü- の分離副動詞形としての本来の意味，機能からは逸脱し，あたかも主語あるいは主題の指標とも見なし得る一種の小詞として使用されている。これは先古典期文語特有の現象であるが，特に仏典においてはこの büged はこの他にも様々の特異な機能をになっている。この問題についてはいずれ別稿において詳述したい。

(57) Conze 1962 の英訳は But he neither abides therein, nor in the treasure island.

(58) Poppe 1955, p. 284 を参照。

(59) Conze 1962 の英訳は An aged man, ailing, one hundred and twenty years old, Although he may have got up, is not capable of walking on his own.

(60) Conze 1962 の英訳は These should be wisely known as the characteristics of the irreversible.

(61) 例えば Тэр хүн энэ мөн「例の人はこの方です」。小沢 1983, p. 233 を参照。

参考文献

小沢重男 1979 『中世蒙古語諸形態の研究』開明書院。

小沢重男 1983 『現代モンゴル語辞典』大学書林。

樋口康一 1980 「羽田博士旧蔵蒙古仏典写本断片について」『アジア・アフリカ言語文化研究』20。

湯山明 1973 「宝徳蔵般若に関する若干の問題」『中村元博士還暦記念論集 インド思想と仏教』春秋社。
Conze, E., 1962, *The Accumulation of Precious Qualities*, New Delhi.
Heissig, W., 1954, *Die Pekinger lamaistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache*, Wiesbaden.
Ligeti, L., 1930, "La Collection mongole Schilling von Canstadt à la Bibliothèque de l'Institut," *TP* 27.
Ligeti, L., 1942-4, *Catalogue du Kanǰur mongol imprimé,* Budapest.
Poppe, N., 1954, *Grammar of Written Mongolian,* Wiesbaden.
Poppe, N., 1955, *Introduction to Mongolian Comparative Studies,* Helsinki.
Poppe, N., 1972, *The Diamond Sutra,* Wiesbaden.
Poppe, N., Hurvitz, L., Okada, H., 1964, *Catalogue of the Manchu-Mongol Section of the Toyo Bunko,* Tokyo and Seatle.
Wiers, M., 1969, *Untersuchungen zu einer historischen Grammatik des präklassischen Schriftmongolisch,* Wiesbaden.
Yuyama, A., 1976, *Prajñā-pāramita-ratna-guna-samcaya-gāthā,* (*Sanskrit Recension A*), Cambridge.